

芳華流転

— サボテンをモチーフにした乾漆造形と装飾の活用 —

美術研究科 美術専攻工芸研究領域（漆芸） 後期博士課程3年 李沛沛

【要旨】

本論文では「芳華流転」をテーマとし、生命についての認識や価値観を論じる。中国語の「芳華」とは基の香しい花の意味が薄れ、気高いイメージがし、現在では主に青春や美しい歳月の比喩に用いられている。人の青春は常に夢や希望に満ち、活力がみなぎり、人生の中で一番美しい年月と言っても過言ではない。しかし、一生に比べると青春は短い。このことから「芳華」は「儂い美を賛美しながら惜しむこと」を表現する言葉である。つまり「芳華」とは物事の変化の中で頂点にあり、その時点の美しさを形容している。「流転」とは光陰の移り変わりや時の流れ、生命の循環が尽きないことである。「芳華流転」という言葉は、博士修了制作を表す最も相応しい言葉として組み合わせた造語である。この中国の言葉やこれらの基となる思想に感銘を受け、「芳華流転」をテーマに制作するのを決意した。年齢に関係なく、つねに精気が溢れる若者たちのように勇気を持って前に進み、転んだり傷ついたりしても諦めず、大胆かつ自由に自分の可能性を探求していき、人生観をたどるという意味も込めている。成長しつづける可能性こそ価値のあるものだと考える。この考え方によって自信不足で悲観的になりやすい自身が支えられ、失敗することを恐れず、夢に向かって一步を踏み出せるようになった。

漆芸をより深く学ぶために東京藝術大学に留学し、美術の各分野を通して日本の伝統文化に馴染んできた。その中で特に秋草文様は絵画や工芸の種類を問わず、その愛らしさや華やかさ故にあらゆる分野に登場し、各時代を反映している。そのことがきっかけで身近な植物をモチーフにしようと考え、現代の日常生活では身近に見られるようになった生命力の強いサボテンを意匠として、今の時代の感覚を基に、開花するサボテンのもつ「芳華流転」を表現することにした。

漆の美には「箱」という形式がある。今回は実用的な目的よりも、鑑賞性を追求し、博士提出作品では乾漆箱を制作する。その理由としてはその箱という容器が密閉的な空間を有し、自身の可能性をそこで表現したいとともに、自分の小世界を作るということも外側の現実世界からの逃避、あるいは隔離というような部分が含まれているからである。そして中国に比べ日本は箱の研究、技術が盛んであり、用途に合わせた多くの箱の種類や名前がある。おそらく文化とともに日本では多くの種類の箱が生まれ、必要だったのであろう。以上の考えから、開花するサボテンをモチーフにして「芳華流転」の乾漆箱を制作している。

本論文の構成は以下のとおりである。

まず、「芳華流転」というテーマの意味やその言葉の基となった「中国古典哲学思想」の説明に加え、「漆」、「サボテン」、「箱」を扱う理由について述べる。中国古典哲学の思想から、生命に対する認識や世界観を成形し、「印籠蓋造」の三段構造の「箱」にそれらを反映させたい。箱の意匠は開花するサボテンにし、その理由や自身の考えを述べ、表現を可能にする漆という素材の魅力と装飾表現の豊富さについて論じる。

次章では、博士修了制作のテーマである「芳華流転」の表現に使用する「造型」と「装飾」の技法研究について論述する。「造形」技法では、箱作りについて日本の乾漆技法を用いる意味を詳説し、サボテンの花や茎部分である胎の制作にあたって使用した技法について論じる。特に茎の凹凸の稜線を形成する方法は中国の「堆起」技法と日本の「刻苧」技法を併用して新しい造型方法を確立し、その技法の各国の背景と現状を比較する。「装飾」技法では、様々な素材と技法の理解を深め、開花するサボテンの装飾と乾漆箱の内側の水紋や星空の表現に活用する。特に自然環境に依存する生物である貝と経済市場に大きな影響を受ける金銀などが、螺鈿と蒔絵技法として時代の変化で生み出される表現方法について考察する。

第三章では、博士修了制作の五つの提出作品において、「芳華流転」というテーマを表現する意義や自身の考え、用いた技法と過程を詳細に論じる。

終章では、これまでの考察がまとめられ、締め括られる。